

対抗軸を探る

-3-

神戸大学名誉教授 二宮 厚美



2024年は元日から、再びエッセンシャルワークが脚光を浴びる中で始まった。「再〇」とはコロナパンデミックの本格化以来、数年ぶりにエッセンシャルワークの確保が能登半島震災地域の緊急問題になったからである。地球的規模での温暖化の影響によって各種災害が慢性化している今日の世界・日本では、もはやエッセンシャルワークの整備・充実が有事の緊急時だけでなく、平時の定常的課題になっているといつてよい。

天変地異による被災だけではなく、広く世界全体に目を向けると、ロシアの軍事的侵略によるウクライナ全域にわたる戦災、またネ

タニヤフ政権イスラエルに共通して求めているものよるガザ地区パレスチナに対するシエノサイド(集約)が典型を示すように、天災だけではなく人災(II 戦災)に備えるエッセンシャルワークの確保・充実の課題は、今や平和の生存権保障にとつて、最優先の課題になっているといつて過言ではあるまい。

憲法前文は「われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存す権利を有することを確認する」と、平和的生存権を高らかに謳っている。この前文のキーワードは「恐怖と欠乏からの解放」であり、能登半島地震の被災者やウクライナおよびガザ地区の被災者が「恐怖II 欠乏からの解放」

を担う仕事だからである。2024年は能登半島地震から開始したが、世間には、政治資金集めパーティ、カジノ誘致に結び付けた万博等のイベント、証券・不動産投機、武器輸出に群がる死の商人など、ブルシットジョブ(ブルジョア的)問題が争点となり、震災復興をめぐるのは、復讐優先か万博優先かの選択、カジノ誘致と不可分の万博経費の膨張をそのまま認めてよいのかどうか是非問題。さらには大阪・関西では維新・吉本・在阪テレビの癒着と「アジメ笑い」芸人筆頭の松本人志のキャラクターがメディアとネット上で「炎上」という事態を作り出した。

コロナ禍や戦災・震災時に緊急に必要なエッセ

ンシャルワーク(医療・ケア・看護等)とは対照的に、政治資金集めパーティ、カジノ誘致に結び付けた万博等のイベント、証券・不動産投機、武器輸出に群がる死の商人などは、ブルシットジョブ(ブルジョア的)と呼ばれる。ブルシットジョブとはブルシット(あほらしい、ばからしい)のジョブ(仕事)というアメリカのスラングである。

エッセンシャルワークを重視するのか、それともブルシットジョブをそのままはびこらすのか、この対決がこころばらくの間、現代日本の鋭い選択問題となるだろう。

再び“エッセンシャルワークかブルシットジョブか” 国内外で最優先の課題に

二宮 厚美 1947年愛媛県生まれ、京都大学大学院経済学・研究科博士課程中途退学。現在、神戸大学名誉教授、福祉国家構想研究会共同代表。経済学、社会学論専攻。近著に「社会サライスの経済学」(新日本出版社、2023年)、大開発達の福祉国家論(新日本出版社、2023年)がある。